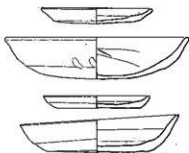


三条遺跡

— 一般県道内山-三条線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



1SK010・黒茶色土出土土師器
【小皿a・丸底杯a・杯a】

太宰府市教育委員会

2001

三条遺跡

—一般県道内山・三条線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

太宰府市教育委員会

2001



三条遺跡周辺の環境（南より）



三条遺跡周辺の環境（南西より）

序

本書は、平成12年度に発掘調査を実施いたしました三条遺跡の埋蔵文化財調査報告書です。一般県道内山-三条線改築工事に伴う調査で、関係されました三条区および福岡県郡珂土木事務所には御支援、御協力賜り心よりお礼申し上げます次第です。三条遺跡は、太宰府天満宮の北にあり、菅原道真の墓所を建立した味酒安行を祀る安行神社があるなど、太宰府天満宮とは関係深い地域にあたります。

今回の調査によって、古代における大宰府を考える上で重要となる道路痕跡を確認し、大宰府条坊跡の範囲を見直す必要がでてくる成果を得ることができました。

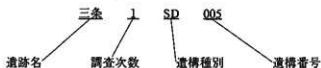
本書が学術研究はもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

太宰府市教育委員会

教育長 關 敏治

例 言

- 1.本書は、太宰府市教育委員会が行なった平成12年度に実施した三条遺跡第1次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2.本書に掲載した発掘調査の原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、調査の報告部分に記載している。
- 3.本書に掲載した調査年度および整理年度は、平成12年度に実施した。
- 4.遺構の実測は中島恒次郎が行ない、深江暁子が補佐した。また図の浄書は中島恒次郎・深江暁子が行なった。
- 5.遺物の実測は、中島恒次郎・深江暁子が行ない、図の浄書は深江暁子が行なった。
- 6.遺構の写真撮影は中島恒次郎が行ない、遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）が行なった。
- 7.遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を指している。
- 8.出土した金属製品の応急処置は、下川可容子が担当した。
- 9.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、『佐野地区遺跡群 I』に記載している。



- 10.本書の執筆は、目次及び項目末尾に記し、編集は中島恒次郎が行った。
- 11.出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
- 12.本書で用いる分類は以下の文献に記載されている。

土師器・須恵器

太宰府市教育委員会（1983）『太宰府条坊跡 II』

太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡 II - 窯跡Ⅰ-』

陶磁器

太宰府市教育委員会（2000）『太宰府条坊跡 XV』

目次

1.はじめに	(中島恒次郎)	1
2.調査組織	(中島恒次郎)	1
3.調査地周辺の環境	(中島恒次郎)	2
4.調査報告		
a.調査に至る経過	(中島恒次郎)	4
b.層位	(中島恒次郎)	4
c.遺構	(中島恒次郎・深江晩子)	4
d.遺物	(深江晩子)	7
5.調査のまとめと今後の課題		
a.道路痕跡	(中島恒次郎)	10
b.課題	(中島恒次郎)	10
付表		
遺構一覧・出土遺物一覧・遺物計測表		11

1.はじめに

太宰府市内へ流入する観光客610万人（平成11年）のうち、その多くを太宰府天満宮が集客し、「学問の神様」として全国からの参拝者で日々賑わいをみせている。この太宰府天満宮の北部に位置する三条区は、菅原道真と関わり深い味酒氏を祀る安行神社があるなど太宰府天満宮とは密接なつながりを有する地域にあたる。

この三条区内に所在する三条遺跡は、天満宮の北の入り口にもあたり、江戸期には宰府の宿の北玄関としての位置付けをも有していた。今回調査を実施した地域は、この北玄関から入った箇所にあたり、近世における宰府参りの道の確認をも一つの目的としていた。

(中島恒次郎)

2.調査組織

三条遺跡1次調査を実施するにあたっての調査組織は、以下のとおり。
(平成12/2000年度)

総括	教育長	長野治己（～12月24日）
		關 敏治（12月25日～）
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美（4月1日～）
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫（～10月23日）
		神原 稔（11月1日～）
主任主事		藤井泰人
		野寄美希
囑 託		鈴木弘江
		城戸康利
調査	技術主査	山村信榮
	主任技師	中島恒次郎（発掘調査・整理報告担当）
技師（囑託）		井上信正
		高橋 学
		宮崎亮一（事前協議・試掘調査担当）
		下川可容子
		森田レイ子
		佐藤道文

(発掘調査作業参加者)

深江暁子、牛島イワヨ、城戸邦典、白水スエ子、田中勝江、松島順子、南美智子、高原改良子、
神田サダ子、大迫フミ子、藤原重登、鎌山恵子、徳永由美子、櫻井俊輔

(整理作業参加者)

深江暎子、伊藤孝子、占部民子、横山美津子、田崎道子、原野正子、吉田勝子、久保喜代香
なお発掘調査にあたって、三条区（区長：不老金之助氏）ならびに荒殿宏氏（福岡県那珂土
木事務所）には現地調査ならびに事後処理について御協力、御援助を賜った。また松田晃、松
田逸宏両氏（松田造園土木）には現地測量、実測作業について御援助いただいた。記して心よ
りお礼申し上げます。
(中島恒次郎)

3.調査地周辺の環境（図1・2）

調査地の自然環境は、太宰府の北東に位置する宝満山の南西裾部にあり、大野城が所在する
四王寺山と宝満山に挟まれた谷部分に位置している。その谷部を流れる御笠川の東岸にあたり、
調査所見からも調査区の西端部分は河川による堆積層が確認できている。その立地が谷部に所
在することもあり、生活空間としては安定さを欠く空間であったと考えられる。このような空
間でありながら、今次調査でも確認できた平安時代後期での土地利用痕跡の確認は、調査地南
部に所在する太宰府天満宮との関係が深いものと考えられる。

調査地の南にある太宰府天満宮に関する縁起については、諸説存在している。一つは菅原道
真の死後二年を経過した延喜五（905）年八月十九日に味酒安行によって道真の墓所に御殿を
建立したのが始まりとされ、延喜十（910）年に安楽寺建立、延喜十五年には御基寺を建立と

【草創日記】は伝える。

一方【筑前国統風土記
附録】には、天智天皇
四年に建すという安楽
寺建立の説を説いてお
り、歴史事実をいずれ
が伝えるのかは、現在
でも検討課題として残
されている。これまでの
太宰府天満宮境内地
内での埋蔵文化財発掘
調査では、奈良期、さ
らには飛鳥期まで遡る
明確な寺院関連遺構の
検出はなく、今次調査
でも人為的な行為が想
定できたのは平安後期
からの遺構であり、太
宰府天満宮周辺にお

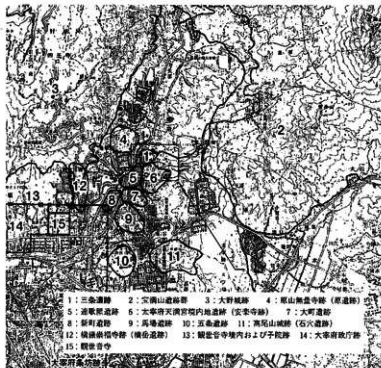


図1.歴史および地理的環境

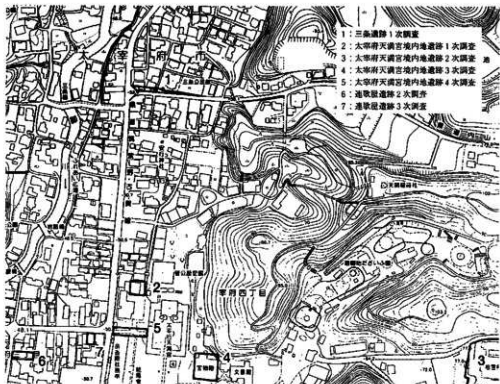


図2 三条道跡1次調査地および周辺の調査地

る大規模な造成など人為性をうかがわせる痕跡も平安後期埋没の遺構群であり、形成時期としては政庁Ⅲ期になされたと考えられる条坊再敷設の時期であろうと考えられる。

今回報告する三条道跡は、太宰府の北東に位置する宝満山への太宰府側登山道の入り口に位置しており、今回調査対象となった一般県道内山-三条線は、現在の登山道となっている。しかし昭和初期までは、一般県道内山-三条線の一つ北側に通っている道路が宝満山への登山道であったとされている。宝満山への登山道入り口にあたるが、宝満山は『竈門山宝満宮縁起』、『竈門山旧記』には大宰府の鬼門にあたる宝満山（竈門山）に勅使を遣わし八百万神を祀ったとある。この記載に相当する考古事象は、祭祀行為として明確に実証し難いものの、宝満山採集資料は飛鳥期にはじまっており、文献記載内容を否定し得る状況にはない。今後調査の手が入ることによって実証されてゆく課題である。

(中島恒次郎)

文献

- 竹内理三 (1983) 『安楽寺の成立』『大宰府古文化論叢 下巻』九州歴史資料館編
 中野権能 (1975) 『太宰府天満宮と宝満山』『首原道真と太宰府天満宮 下巻』太宰府天満宮文化研究所
 念住靖彦 (1979) 『大宰府』教育社歴史新書
 太宰府市 (1992) 『太宰府市史 考古資料編』

4.調査の報告

a.調査に至る経過

開発地は、宰府4丁目856-1外（宰府5丁目821-7・20、宰府6丁目858-9）に所在し、太宰府天満宮のほぼ真北に約300mの位置にある。道路改良工事に伴う埋蔵文化財取扱いの有無について、平成11年11月に那珂土木事務所より問い合わせがあり、その後平成12年2月21日に再度問い合わせがなされた。周辺の試掘調査により遺構が確認できており、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が極めて高いことから、試掘調査を実施し、規模確認の後、発掘調査が必要との回答を行った。道路改良事業は平成12年10月開始予定とのことであったが、協議により平成13年1月に発掘調査を開始し、終了後道路改良事業着手とのことで合意をみた。試掘調査の結果、調査対象地とした地番のみ遺構が確認できたことから発掘調査対象地として協議を行った。

その後、文化財課の事業調整により、平成12年10月より1ヶ月の予定で調査着手することで再度協議を行い、平成12年10月25日から同年11月10日の期間で調査を実施した。開発対象面積250㎡、調査面積39.05㎡を測る。試掘調査および事前協議は宮崎亮一が行い、調査は、中島恒次郎が担当した。

調査対象区域は、現況で生活道路として活用されていることもあり、長期にわたる調査区設定が困難な状況にあった。そこで調査にあたって、地番ごとにトレンチを設定し、重機による表土除去後、遺構検出から遺構調査、その後記録を行う一連の諸作業を一日で終了するという調査方法をとらざるを得なかった。したがって、都合6カ所のトレンチを設定し、同一地番においては小番号を付与して設定している。

b.層位

宅地化された地域にあたり、周辺水田よりやや標高が高くなっていることから、造成されている可能性があった。調査の結果、現標高から0.5mほどは真砂土によって盛り土造成されており、この造成土下に約0.2mほどの旧耕作土が確認できた。遺構検出面までは、さらに0.4mほどの遺物包含層（茶色土）を除去し、その下位に黄色土を基盤層として、その層に遺構が形成されていた。遺構形成面は、平安時代後期と鎌倉時代が同一面として確認できており、当時の生活面がほとんど改変されずに形成されていたのか、後世の削平によって同一面として確認されたのかは決し難いが、遺構形成時期によって検出できた遺構に差が生じていることから、溝などの深めの遺構のみしか検出できなかった平安時代後期の生活面が削平され、その後鎌倉期の生活面が形成された可能性が高い。

（中島恒次郎）

c.遺構（図3・4）

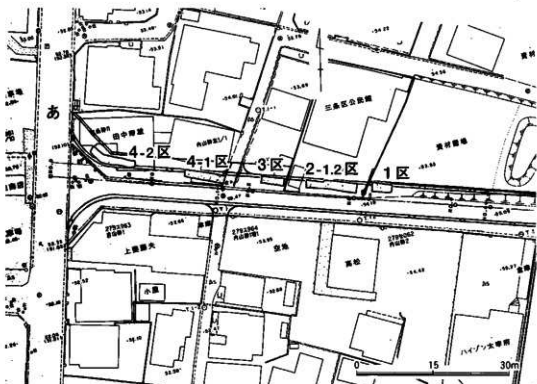


図3.トレンチ設定図 (S=1/750)

調査によって検出できた遺構は、調査規模が極めて狭小であることから、性格付与については可能性の域をでないもの、また小穴についても橋にあたるのか建物の柱なのかの判断できないものが大半であり、性格確定については今後の周辺調査に委ねるしかない。

調査区の設定は、調査地域が東西に延びることからトレンチとし、東から1区、2区、3区、4-1区、4-2区とした。(図3)

1) 溝

1SD005

2-1区調査区内の中央よりやや西側に検出した南北溝で、溝幅は約2.3m、残存する深さは0.38m～0.33mを測る。堆積土は、上層より垂円礫を多く含んだ茶色土→黄色砂質土→黒茶色土であり、下位二層については自然堆積である可能性が高いが、最上層に関しては、基質層が土であるにも関わらず、10cm前後の垂円礫を多量に含んでいることから、人為的に埋められた可能性が高い。

1SD008

2-2区調査区内のほぼ中央に検出した南北溝で、溝幅は約0.4m～1.4m、残存する深さは約0.18mを測る。堆積土は、黄色砂質土ブロック混入の茶灰色土→黄茶色砂質土である。検出当初は、1SD015と異なる遺構と認識していたが、調査を進めるにつれて、1SD015と同一遺構で

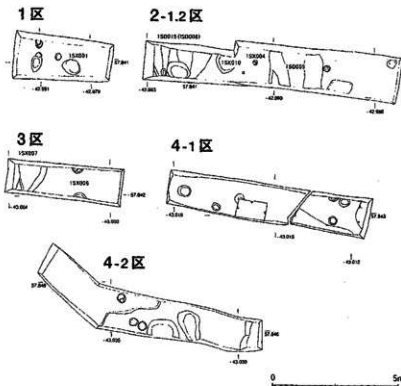


図4 遺構配置図 (S=1/150)

土師器の他に鉋滓も出土していることから、鉋物ないしは鍛造関連遺跡が周辺に展開している可能性が考えられる。

2) 土壌

ISK010

2-2区調査区内の東端に検出した土壌で、調査区外に延びている為遺構全体は不明であるが、調査区内では円形の遺構形状をしている。長軸長は0.75mで、短軸長は0.7m、残存する深さは0.13m~0.16mを測る。堆積層は黒茶色粘質土で、出土遺物は、ほぼ同法量の土師器杯・小皿が完形でかつ多量に出土しており、さらに単一層より出土したことから一括廃棄に伴う遺物であると考えられる。

3) その他の遺構

ISX001

あると考えられ、同一溝の堆積層の差の可能性が高い(図4)。

ISD015

2-2区調査区内の西端に検出した南北溝で、堆積土は炭化物混入の黒茶色粘質土→黄茶色砂質土であり、堆積土と遺物の状況から、埋没時期の幅があるがISD008と一連の溝遺構と考えられる。溝幅は約0.65m、残存する深さは約0.45mを測る。

この遺構からは、



図5 ISD005北壁土層実測図 (S=1/60)



図6 ISD015南壁土層実測図 (S=1/60)

1区調査区内のほぼ中央に検出したピット群で、長軸長は約0.2m～約0.75m、残存する深さは約0.11m～0.33mを測るものがあり、堆積層は茶色土である。

ISX004

2-1区調査区内の西端に検出した2つの小穴で、1つは直径約0.1m、深さ0.21mを測る円形の穴で、もう1つは直径約0.2m、深さ0.17m～0.21mを測る穴である。

ISX006

3区調査区内の中央よりやや東側の北端と南端でそれぞれ検出した円形の遺構である。北端の遺構は、直径0.45m、深さ約0.9mの半円形で、南端の遺構は直径約0.55m、深さ約0.11mの半円形である。

d.遺物 (図7)

遺構出土遺物について、既存の分類があるものについては分類を「出土遺物一覧」に記載し、分類がまだなされていないものおよび、計測値公表にあたって、基準となる型式を提示する必要があるものについて実測図を掲載した。

1) 溝出土遺物

ISD005

須恵器

鉢(1) 口縁部から体部上位にかけて残存する破片で、内外面は丁寧な回転ナデがなされている。口縁部が若干内湾し、端部は丸く仕上げられている。焼成・還元ともに良好な製品である。

灰釉陶器

碗(2) 口縁部から体部上位にかけての破片で、内外面は丁寧な回転ナデで処理されている。体部外面には釉だれがみられ、内面は口縁部に軸が残存し、体部内面にも部分的に軸が残存している。釉は緑灰色の色調を呈している。

2) 土坑出土遺物

ISK010

土師器

坏(3) 坏aで、やや歪んでいる。底部外面はイト切りで処理され、幅約3mmの板状圧痕が観察できる。内面は、回転ナデの後、不定方向のナデが観察できる。

(4・5) いずれも小皿aに該当し、底部はイト切りで処理され、板状圧痕が観察できる。内面は、4・5は回転ナデの後不定方向のナデが観察できる。なお、5は口縁部形成の回転ナデをした際に、指頭圧により体部下位から底部がやや窪み、底部内面が若干盛り上がったような形

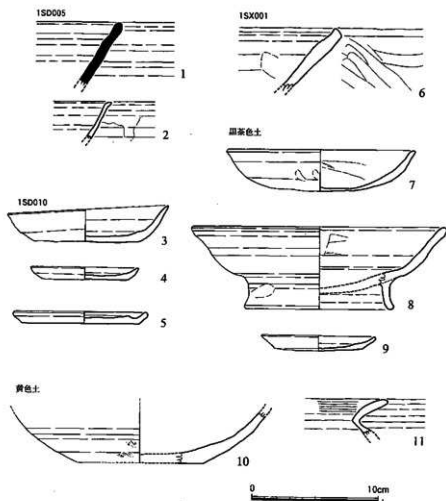


図7.三条遺跡1次調査出土遺物実測図 (S=1/3)

状をとり、口縁部も丸味を帯びた仕上がりになっている。

3) その他の遺構出土遺物

1SX001

土師器

鉢 (6) 口縁部から体部上位にかけての破片で、内面は回転ナデ、外面は回転ナデの後、数条の不定方向のナデが観察できる。

4) 土層出土遺物

黒茶色土出土遺物

土師器

丸底坏 (7・8) 7は高台を貼付しない丸底坏aで、内面にミガキbの痕跡が観察でき、外面は

回転ナデで仕上げられている。表 1. ISK010出土土師器法量計測値

底部外面は、ヘラ切り後丁寧なナデで処理されている。8は高台を貼付する丸底環cで、内面にミガキbの痕跡が観察でき、外面は回転ナデで仕上げられている。高脚の高台でやや外反し、高台接合部は回転ナデで処理されている。

皿 (9) 口径が小さく小皿aに該当し、内面は回転ナデで不定方向のナデで仕上げられている。底部外面はヘラ切りで処理されている。

黄色土出土遺物

黒色土器

鉢 (10) 体部下位から底部にかけての破片で、内面は磨耗しているがミガキで調整

され、外面は回転ヘラケズリで丁寧に仕上げられており、底部外面はヘラケズリで処理されている。内面のみを黒色化するA類。

弥生土器

甕 (11) 口縁部から体部上位にかけての破片で、頸部が「く」字形に強く屈曲している。口縁部内面は磨耗しているが、薄くハケの調整痕跡が観察できる。外面は丁寧なヨコナデにより仕上げられている。

(深江暁子)

種別	器種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B		
土	小皿a	イト	1	R-001	図7-4	写5	8.6	1.0	6.6	○	○
		イト	2	R-003	図7-5	写5	10.6	0.95	8.4	○	○
	環a	イト	1	R-002	図7-3	写5	12.8	2.15- 3.0	8.6	○	○
		環a	イト	1	a-001			12.0	2.3	7.8	
	イト		2	a-002			13.2	2.1	9.0	○	○
	イト		3	a-003			13.0	2.6	9.2		
	イト		4	a-004			12.3	2.4	8.2	○	
	イト		5	a-005			12.8	2.7	8.5	○	○
	イト		6	a-006			12.8	2.4	9.0	○	○
	イト		7	a-007			12.6	2.1	8.0	○	○
	イト		8	a-008			13.4	2.2	9.0	○	○
イト	9		a-009		写5	13.1	2.9	9.3	○	○	
小皿a	イト	1	a-001			10.0	1.1	8.0	○	○	
		2	a-002			9.0	1.2	7.0			
		3	a-003			8.2	1.0	6.2	○	○	
		4	a-004			8.8	1.1	7.2	○	○	
		5	a-005			9.0	0.9	7.6	○	○	
		6	a-006			8.4	1.0	7.0	○	○	
		7	a-007			8.6	1.1	7.0	○	○	
		8	a-008			8.6	0.9	7.2	○	○	
		9	a-009			9.0	0.8	7.1	○	○	
		10	a-010			8.6	1.2	6.0	○	○	
		11	a-011			8.6	1.2	7.0	○	○	

5.調査のまとめと今後の課題

表2.遺構計測値

a.道路痕跡

今次調査によって、ISD005と

ISD008・015の三条の溝は、堆積土から
出土した遺物より、大宰府XIII期に埋没

遺構名	計測座標 (m)		政庁南門中点からの距離 (m)	
	X座標	Y座標	X方向	Y方向
三ISD001	57841.400	-44989.100	1150.99	1820.20
三ISD015	57841.250	-42993.970	1150.79	1815.34
三ISF020	57841.100	-42991.300	1150.67	1818.01

したことがわかり、同時期に埋没および、ほぼ平行して検出できたことから、これら遺構に挟まれた空間は、道路遺構の可能性が高い。さらに条坊内で検出される道路側溝の埋没時期とも同時期であることから、政庁III期施工の道路の可能性も高くなってきた。しかし調査区域が極めて狭小であることから、積極的に道路と認定するには、やや早計の感もあり、周辺の調査によって延長部分の確認が課題として残る。また今回調査した地域は、鏡山推定条坊案の区域外になり、政庁III期における条坊施工範囲の見直しなど今後に残す課題となる。

政庁中軸線からの各遺構の有する距離は、表2に記載したとおりであり、道路任意中心で約1818mを測る。これまで確認できている政庁III期施工条坊の東西単位幅(88m)で除算すると、20.6の数値が求められ、20坊目の中心部分に位置することになる。鏡山推定条坊案では12坊までしか推定されておらず、20坊目という呼称は不的確と考えられることから、仮称「20坊目」ということで理解していただきたい。しかし今年度確認した条坊跡209次・212次調査から、政庁III期施工条坊の均等割付に対して疑問を投げかける成果を導き出したことから、この「20坊目」の坊間路とする根拠自体も、はなはだ薄弱な状況となってきた。この点についても、課題を残すこととなった。

また今回調査で確認したISD005とISD008・015の溝で画された空間を仮に坊間路と仮定した場合、今次調査地の西約58m弱の地点に現在の道路が南北に通っており(図3-ア)、この道路の施工時期について確認する必要性が生じてきた。

b.課題

開発対象区域が狭小であったことから、遺構の性格を十分に把握するまでの成果を得られたとは言い難い状況にある。しかし前項で記載した政庁III期施工条坊が廃絶する時期と同時期の道路痕跡と思しき遺構を検出したことは、今次調査の成果であった。さらに、鎌倉期における椀形溝の出土は当該地域における空間利用状況を推察する上でも貴重な成果を得ることができた。このように一定の成果を得る一方で、調査区の狭小さからくる遺構性格付と限界が存在しており、想像の域を脱し得ていない。したがって、周辺調査への課題として以下に上げる項目が上げられる。

- ・ISF020とした遺構の性格

南北延長箇所での確認と、埋没時期の精査。溝遺構であることからくる調査区外延伸部分

の調査が必要となってくる。このことから埋没時期を常に精査してゆく必要がある。今次調査では道路側溝の埋没時期は、平安後期、大宰府XIII期に考えられる。さらにISF020は、少なくとも鎌倉期、大宰府XVII期にはISK010や小穴が掘られていることから、この時期には道路として機能しなかったと考えられる。

・東西路である条路の有無。

太宰府天満宮の南に位置する箇所、南北の溝が馬場遺跡2次調査で確認されており、南北道路が鏡山推定条坊域外に存在している可能性はうかがえる。それに対し、東西路の確認はできておらず、遺構の有無を確認することによって条坊として成立するかどうか検討をしてゆく必要がある。

・ISK010から出土した椀形滓（写真5）

周辺における鎌倉期の鋳造・鍛造工場の確認。

・近世における土地利用状況

今次調査では、近世期の道路・井戸など性格を付与し、空間利用状況を推定できる遺構の検出はできなかった。したがって、太宰府天満宮北部の土地利用状況まで踏み込んだ成果を導き出せていない。

(中島恒次郎)

表3.遺構一覧

S-番号	遺構番号	遺構性格	地質土	備考【先後関係など】	時期	地区
1	ISX001	ピット群			平安後期	1区
2		ピット群			平安後期	2-1区
3		凹み	茶灰色土		平安後期	2-1区
4	ISX004	ピット群	茶灰色土		平安後期	2-1区
5	ISD005	溝	茶色礫混土→黄色砂質土→黒茶色土	茶色礫混土、黒茶色土には20cm前後の車内礫を含む	平安後期	2-1区
6	ISX006	ピット群	黒茶色土		平安後期	3区
7		溝状遺構			平安後期	3区
8	ISD008	溝	灰茶色砂質土→黄色砂質土ブロック 流入茶灰色土		平安後期	2-2区
9		ピット群	黒茶色土		平安時代	4-1区
10	ISK010	土壇			鎌倉時代	2-2区
11		ピット			近世～	4-1区
12		ピット	茶灰色土		平安後期	4-2区
13	欠番					
14	欠番					
15	ISD015	溝	黒茶色粘質土	ISD008と一連の溝遺構	鎌倉時代	2-2区
黒茶色土			遺構検出時の土			2-4区
黄色土						1区

表4.出土遺物一覧

S-1

土 器 類	環c×皿c、小皿a(ヘラ)、煎沸具
土 質 土 器 類	こね鉢
石 製 品	磨礫石碎片

S-2

土 器 類	碗c2 (厚縁土師器)、環×皿
阿波瀬系青磁	皿; I (1)

S-3

土 器 類	環(イト)、小皿a(イト)、更a
黒色土器A類	
白 磁 類	皿; IV (1)

S-4

土 器 類	環(イト)
-------	-------

S-5

復 原 器 類	環c、更
土 器 類	丸底環a(ヘラ)、小皿a1(ヘラ×イト)、小皿a2(ヘラ)、鍋
黒色土器A類	碗c2
黒色土器B類	碗
復原土器	こね鉢
次 輪 陶 器 類	
白 磁 類	皿; IV (1)、IV-b (1)、V-2 b (1)
石 製 品	アモカイト製片
瓦 類	平瓦(橋子母)、丸瓦(橋子母)

S-6

土 器 類	丸底環、碗c2
そ の 他 炭化物	

S-7

復 原 器 類	碗片
土 器 類	環(イト)、小皿a1(イト)
黒色土器A類	碗c
阿波瀬系青磁	皿; I (2)
復原土器	こね鉢
白 磁 類	皿; IV (1)、碗片 (1) その他: 碗片 (1)
瓦 類	平瓦

S-8

土 器 類	丸底環、小皿a1(ヘラ)、小皿c、碗c、大碗c
黒色土器A類	碗c
黒色土器B類	碗c
白 磁 類	皿; 碗片 (1)

S-9

土 器 類	皿、小皿a、碗c
-------	----------

S-10

土 器 類	環(イト)、小皿a1(イト)
白 磁 類	皿; 碗片 (1)
そ の 他	砥澤 (2-a)

S-11

白 磁 類	皿; IV (1)
	皿; 皿 (1)
肥前系陶磁器	皿 (1)、染付碗片 (1)
瓦 類	碗片

S-12

土 器 類	小皿a(イト?)
白 磁 類	碗片 (1)
石 製 品	滑石製石鍋

S-15

土 器 類	丸底環a(ヘラ)、小皿a1(ヘラ×イト)、小皿c、碗c、大碗、鍋
黒色土器A類	碗
黒色土器B類	碗
そ の 他	砥澤 (2-f)

青 色 土

復 原 器 類	皿
土 器 類	環(イト)、丸底環(ヘラ)、小皿a1(ヘラ×イト)、碗c、鍋
黒色土器A類	鉢
黒色土器B類	碗
土 質 土 器 類	鉢、煎鉢
阿波瀬系青磁	皿、碗片
白 磁 類	皿; IV (1)、IV-1 (1)、碗片 (1) 皿; IV (1)
中 国 陶 器	皿; 碗片 その他: A類 (1)
肥前系陶磁器	紅磁 (1)、染付碗 (1)
赤 土 器 類	
瓦 類	平瓦(橋子母、橋子母)
石 製 品	磨礫石製片

黒 茶 色 土

復 原 器 類	環c、更
土 器 類	環(イト)、丸底環a(ヘラ)、丸底環c、鍋 小皿a1(ヘラ×イト)
瓦 類	碗片
阿波瀬系青磁	皿; 碗片 (1)
高 麗 青 磁	碗; 碗片 (1)
白 磁 類	碗; 碗片 (1) 皿; 碗片 (1) その他: 碗片 (1)
中 国 陶 器	A類 (1)
瓦 類	碗片

表5 遺物計測値

S-1

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	こね鉢	1	R-001	図7-6	—	4.75+	—		
		1	a-001		10.0	1.2	6.0		
	小皿	2	a-002		10.0	1.0	7.2		
		へラ	3	a-003		8.0	1.3	4.4	

S-5

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	こね鉢	1	R-001	図7-1	—	4.9+	—		
		海	R-002	図7-2	—	3.0+	—		
土	小皿a	へラ	1	a-001		11.0	1.1	7.6	
		イト	2	a-002		9.4	1.1	7.4	
	イト	3	a-003		10.6	1.2	7.8		
	へラ	4	a-004		9.8	0.9	7.0		
小皿a	2	1	a-001		10.0	0.6	7.0		○

S-7

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	
土	垢	イト	1	a-001		12.2	2.6	8.8		○
		小皿	イト	1	a-001		9.2	0.9	7.2	
	イト	2	a-002		8.6	1.0	7.0			
	イト	3	a-003		8.0	1.1	6.0		○	
	イト	4	a-004		8.65	1.2	7.9		○	

S-8

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	1	a-001		9.8	1.1	7.0		○
		小皿	1	c-001		9.8	3.0	5.2	
	イト	2	c-002	写5	10.3	3.0	4.6		

S-12

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	1	a-001		9.8	1.1	7.2		

S-15

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	丸底杯	へラ	1	a-001		15.0	—	—	
		へラ	2	a-002		15.0	—	—	
	小皿a	へラ	1	a-001		10.4	—	—	
		イト	2	a-002		9.4	1.1	6.4	

黒土

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B	
土	小皿a	へラ	1	R-001	図7-9 写5	9.0	1.3	7.0		○
		丸底杯	へラ	1	R-002	図7-7 写5	14.8	3.35	11.2	
	垢	イト	1	R-003	図7-4	20.35	6.55	11.6		
		イト	1	a-001		12.0	2.1	8.4		○
	イト	2	a-002		14.0	2.6	9.6		○	
	イト	3	a-003		14.0	2.3	10.0		○	
	イト	4	a-004		13.0	2.3	9.0		○	
	イト	5	a-005		12.9	2.9	8.5		○	
	イト	6	a-006		13.0	2.6	8.9		○	
	丸底杯	へラ	1	a-001		14.9	3.5	13.0		○
		へラ	2	a-002		14.8	3.35	11.2		
		へラ	3	a-003		16.0	2.6	10.8		○

黄土:

種別	器 種	番号	遺物番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土	鉢	1	R-001	図7-11	—	28.5+	—		
		鉢	へラ	1	R-002	図7-10	—	4.2+	10.0
	小皿a	1	a-001		8.8	1.0	6.4		○
		イト	2	a-002		9.6	1.1	7.2	
	イト	3	a-003		9.4	1.1	8.0		○
	イト	4	a-004		8.6	1.2	6.5		○
	へラ	5	a-005		10.0	1.4	7.6		○
へラ	6	a-006		9.4	1.0	7.0		○	
へラ	7	a-007		9.8	1.3	6.8		○	

写真図版



1区完掘状況 (西より)



2-1区完掘状況 (西より)



2-2区完掘状況（東より）



3区完掘状況（東より）



4-1区完掘状況（西より）



4-2区完掘状況（東より）



ISD005土層観察 (南より)



ISD015土層観察 (北より)

ISD015 (S-8) 出土土師器



图 7-4

ISK010 出土土師器



图 7-3

ISK010 出土鉢滓

黑茶色土出土土師器



图 7-9



图 7-7

图 7-5



图 7-5

太宰府市の文化財 第51集

三条遺跡

一般県道内山・三条橋改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13（2001）年3月

編集 太宰府市教育委員会
発行 〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1
印刷 有限会社 システム・レコ
〒813-0032
福岡県福岡市東区土井1丁目11番7号